

幸せで豊かな未来へ、 旭川医科大学の これからの挑戦。

学長 吉田 晃敏



国立大学法人旭川医科大学は、地域に根ざした医療・福祉の向上を旗印に、都市部と地方との医療格差を是正したいという、国の強いリーダーシップの下、国立の新設医科大学の第一号として1973年11月に開学しました。

以来、卒業生を、地域医療の最前線や研究施設、行政機関へと送り出してきました。

北海道における少子高齢化・過疎化は全国を上回る速さで進行していくと予想され、本学は国立大学病院として国の方針に従い、公立病院を後押しします。地域との連携を密にした医療人の育成を実践していくために、2019年に地域共生医育統合センターを設置しました。

医学科在学生の60%が北海道出身者で、本年度の医師臨床研修マッチングでは56名が本学出身(自大学出身者数 全国1位)でした。

また、地域中核病院からクラウドに送られた情報に本学病院の医師(約500名)が各々の携帯端末でアクセスできるシステムを日本で初めて開発し、専門医への迅速なアクセスにより、患者搬送中に治療方針の決定や手術の準備が可能となり、「高度急性期医療の機能強化」を図ることが出来ました。

一方、看護学科の教育には各学年に「地域包括ケア論」を取り入れ、当該ケアを担う看護師・保健師・助産師の育成に向けた教育を行い、2019年に設置した看護職キャリア支援センターで地域包括

ケアシステムを担う看護職を本格的に育成し、さらに、高度急性期から在宅医療まで「当事者の視点に立った地域包括ケアを担う」人材育成を行います。

さらには、外国人人材を育成し国際医療へ貢献することを目的に「国際医療支援センター建設」を進めています。ロシアを中心にアジア・中東諸国など外国の医師、看護師、医療技術者を受け入れ、本学の専門医が日本の最先端の医療機器を使って教育し、クラウド遠隔医療も応用するなど、人材育成を図っていきます。世界中の誰もが良質な医療サービスを受けられる医療インフラの構築を目指すことが、「本学の特徴を活かした国際貢献」であります。

入試制度改革により2017年度に「国際医療人育成枠」を設けました。

2018年12月には、世界初となる超高精細映像「8K」内視鏡を用いた腹腔鏡手術システムを導入しました。従来に比べ術野を細部まで高画質で映し出せるようになり、出血や術後の合併症のリスクを低減できることで、より確実に安全な手術の施行が可能となりました。

今後も、中核医療機関として先進技術を活かした高度な医療の提供を目指すとともに、医療の効率化・多角化を推進してまいります。

旭川医科大学基金へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。